

一橋大学審査博士学位論文要旨

論文タイトル： 言語の機能と変異の関係—若年層の日常会話データをもとに—

提出日： 2015年2月27日

氏名： 原田幸一

旧所属： 一橋大学大学院言語社会研究科

博士後期課程 2014年3月31日付単位修得退学

本研究は、若年層による日常会話をデータとし、社会言語学の観点から言語の機能と語形変異の関係について定量的に分析し、考察を行うものである。

1章では、社会言語学の立場から本研究の位置づけを行った。例えば、「トイウカ」という言語形式は、近年縮約形「てか・つか」の使用が見られるが、「というか」と「てか」の使い分けといった、会話における「トイウカ」の語形の使い分けは現在のところ内省では不明である。本研究は、語形の使い分けの問題のうち、こうした同一の言葉における内省では判断できないレベルの使い分けという、ミクロな問題を扱うものである。また、日常会話をデータとして語形変異の分布の解明を目指す点で、変異研究と談話研究という社会言語学における二つの研究の流れの上に位置づけられ、これら二つの研究を結びつける研究とすることができる。

2章では、本研究に関わる先行研究をまとめ、本研究の枠組みと目的を述べた。本研究では言語の機能的側面へのアプローチとして van Dijk の意味論レベルと語用論レベルの記述を参考にした。意味論レベルの意味とは言語形式が示す語彙的意味と命題間の論理的意味を示すこととし、語用論レベルの機能とは言語形式が担う言語行為的機能と話題調整機能を示すこととした。分析の対象とする言語形式の選定は、実際に行われた会話データを用いる利点の活用を重視して行った。実際に行われた会話をデータとして使用する最大の利点の一つは、話し手と聞き手との間における相互作用 (interaction) の特徴が時間の流れのなかで観察できることである。話し手と聞き手との間で続けられる発話のやりとりにおいて、相互作用の特徴が特に観察されると考えられる部分をターン冒頭部と考え、本研究では、ターン冒頭部で使用され、標準形に対する変異形が観察されるいくつかの言語形式を対象として定量的分析を進めることにした。

3章では、データについて説明した。本研究で用いたデータは、筆者が2009年と2010年に収集した若年層による日常会話データである。首都圏の大学に通い首都圏に在住する大学生130名(男性76名、女性54名)に協力を仰ぎ、親しい友人同士で収録に参加してもらい、1グループあたり約1時間、総収録時間数約53時間半(全部で51グループ)の日常会話データを収録させてもらった。会話参加者130名のうち、首都圏若年層が50名、

非首都圏若年層は 80 名であった。51 グループのうち、首都圏若年層だけで構成されるグループが 8 グループ、非首都圏若年層だけで構成されるグループが 16 グループ、それ以外が 27 グループであった。

4 章から 7 章までが本論である。4 章では、「てか・つか」などの縮約形の使用が指摘される「トイウカ」を分析した。先に説明したデータのうち、51 グループ分全てのデータを使用した。分析の結果、「トイウカ」の用法が意味論的用法（＜暫定提示＞＜言い換え＞＜譲歩補足＞）と語用論的用法（＜話題導入＞＜話題維持＞）に分類できること、種々の形式のうち縮約形「てか」が出現数と使用者数が最多であること、テ系では意味論的用法より語用論的用法のほうが「てか」の割合が高く、ツ系では意味論的用法より語用論的用法のほうが「つか」の割合が高いこと、意味論的用法と比較して語用論的用法が増加していることを明らかにした。分析結果にもとづき、縮約形「てか・つか」の使用に関して単純化の傾向を指摘し、単純化を進める要因として頻度の増加が関わる可能性を主張した。

5 章では、「ちが・ちや」という新形式の使用が見られる「チガウ」を分析した。先に説明したデータのうち、首都圏若年層によるデータを使用した。分析の結果、新形式は形式「ちがう」の次に出現数が多いこと、「チガウ」が後接要素を伴わない場合、新形式が半数を占めること、新形式は用法によって使用傾向が異なることが明らかとなった。新形式は＜否定＞と＜話題維持＞で使用され、「チガウ」が後接要素を伴わない場合、＜否定＞で新形式が半数近くを占め、＜話題維持＞で新形式が多数を占めていた。分析結果にもとづき、新形式の使用に対して単純化の傾向を指摘した。特に、「ちが」に関しては、文法的な単純化として、形容詞の語幹終止用法からの類推の可能性を指摘した。

6 章では、「だか・だ」などの縮約形の使用が目立ついわゆる順接の接続詞「ダカラ」を分析した。先に説明したデータのうち、首都圏若年層による二者間の会話データを使用した。分析の結果、「ダカラ」の縮約率は、後続ポーズの有無・用法・性別と有意な関連があり、後続ポーズが有るより無いほうが高く、帰結的用法より非帰結的用法のほうが高く、女性より男性のほうが高いことが明らかとなった。分析結果にもとづき、縮約率がこれら 3 変数と有意な関連がある背景要因として、「発音労力の軽減」「形態的な合理化」「社会規範の性差」を主張し、3 変数の要因としての妥当性を示した。更に、縮約形を標準形からの言語変化の中に位置づけ、「それだから」＞「だから」＞「だか／だ」という言語変化を想定した。

7 章では、近年単独で頻繁に使用される「タシカニ」を分析した。先に説明したデータのうち、一応の文字化の終了した約 23 時間 10 分のデータを使用した。分析の結果、「タシカニ」の用法は 3 分類できること（自分が下し判断に対し間違いないとの認識を示す用法①と、自分以外の者が下した判断に対し間違いないとの認識を示す用法②、自分以外の者が下した判断に対し「そうだね」と同意する用法③）、用法③が 6 割以上を占め、ターン構成Ⅱ（一つのターンが「(感動詞+) タシカニ」で構成される）が最多で 4 割を占めること、

典型的な形式は「たしかに」であり、変異形「たしかし」は出現数・使用者数ともに少ないこと、「たしかし」は用法③での使用に限られ、8割がターン構成Ⅱであることが明らかとなった。分析結果にもとづき、「タシカニ」の用法②から用法③への変化に関して「語用論的強化」と「コミュニケーションの効率化」という観点から説明し、「たしかに」から「たしかし」への変化に関して「発音労力の軽減」の傾向を指摘した。

8章では、本論における分析結果をまとめ、全体的な考察を進めた。本論において分析した言語形式の全てで、用法がより語用論的である場合において変異形の使用割合が高くなっており、「テイウカ」「チガウ」「ダカラ」では用法がより語用論的である場合において語形モーラ数が短くなっていることを確認した。また、言語の機能的な観点から各言語形式について、言語の機能と語形変異の関係に合理性という特徴を読み取った。以下に、各言語形式に対して読み取った合理性を説明する。

「トイウカ」においては、語彙的意味を示さない<話題導入><話題維持>という語用論的用法での縮約形「てか・つか」の使用は、「トイウカ」の構成要素である「と+言う+か」のうち語彙的意味を示す「言う」が脱落または縮約された語形の使用であるという点で、合理的である。「チガウ」においては、後接要素を伴わず、かつ叙述性の低い<否定><話題維持>という用法での新形式「ちが」の使用は、機能的に必要性が低いと言える活用語尾“u”が脱落された語形の使用であるという点で、合理的である。また、語彙的意味と命題間の論理的意味を示さない<話題維持>という語用論的用法での新形式「ちや」の使用は、語彙的意味を示す語幹「ちが」が縮約された語形の使用であるという点で、合理的である。「ダカラ」においては、「理由→帰結」という命題間の論理的意味を示さない語用論的用法での縮約形「だか・だ」の使用は、「だから」の構成要素である「断定辞『だ』+接続助詞『から』」のうち命題間の論理的意味を示す構成要素「から」が縮約または脱落された語形の使用であるという点で、合理的である。「タシカニ」においては、他の2用法に比べてより語用論的と言える用法③での変異形「たしかし」の使用は、有声鼻音「に」がより発音労力が軽減される無声摩擦音「し」に変化し、より少ない労力で同意を示すことができる語形の使用であるという点で、合理的である。

更に8章では、本研究が採った言語形式の選定方法と8.2までの分析と考察にもとづき、8.3において共時的に見た言語の機能と語形変異の関係について以下の傾向を仮説として提示した。

仮説1： ターン冒頭部で使用される言語形式が、意味論的用法と語用論的用法の二つの用法を有する場合、意味論的用法より語用論的用法のほうが変異形の使用の場となる。

仮説2： ターン冒頭部で使用される言語形式が、意味論的用法と語用論的用法の二つの用法を有し、標準形と変異形という語形変異の分布が観察される場合、その言語形式の語形変異の分布には言語の機能的な観点から見て合理性という特徴が

ある.

これらの仮説に関連して、言語形式における用法拡張（意味論的用法から語用論的用法への拡張）がきっかけとなり、語形を変異させる要請が生じること、用法拡張により生じる不整合を解消させようとする事で語形を変異させようとする傾向が現れ、言語の機能と語形における合理性という特徴が現れることを主張し、更により大きな視点から、用法の異なりに対応した語形の異なりが生じる傾向は、「意味と形式の一対一対応」へと向かう傾向の現れとも考えられることを主張した。

9章では、本研究をまとめ、今後の課題を述べた。今後の課題として、提示した仮説の検証のために共時的な事例研究を更に蓄積すること、通時的な観点から過去の会話データを発掘し、将来再び会話データを収集することにより用法変化と語形変化を実証すること、言語理論への貢献を見据え文法化などの言語変化理論との関連を考察することなどを挙げた。